

## 〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成 4年次 —各種カリキュラムの連動を磨き、学校の教育力を高める—

広島大学附属小学校  
山中 勇夫・坂田 行平・芦田 桃子・野元 祥太郎

Nurturing children who can continue to enjoy "others" in the fourth year: Aiming to link the curriculum in each subject area to enhance the educational capabilities of the school as a whole

Hiroshima University Elementary School

Isao Yamanaka, Kouhei Sakata, Momoko Ashida, Shoutarou Nomoto

Abstract: This practice is based on research conducted at an elementary school affiliated with Hiroshima University. The goal was to nurture children who can continue to enjoy "others." The "others" referred to here is based on the concept of "others" in philosophy. To this end, we spent three years developing a curriculum that would enable students to continue to enjoy "others" in each subject area. Then, in the fourth year, we aimed to link the curriculum in each subject area to enhance the educational capabilities of the school as a whole. There were three major strategies for linking the curriculum. 1. Connecting the curriculum of each subject area with the content of the content. 2. Connecting the curriculum of each subject area with the content of competencies. 3. Connecting the value of learning in each subject area that was practiced discretely by the learners themselves to find their own meaning. This paper is a record of that practice and discussion.

Key words : education, link the curriculum, "others" in philosophy

### I, 問題意識の所在

本研究は4年前に始まった学校研究である。始まった当初に設定された問題意識は以下の2点に集約される。

#### (1) 予測困難な社会

平成29年～告示の学習指導要領のキーワードにもなっている「予測困難な社会」では、所与のものとして伝達される知識や技能のみでは解決できない問題との遭遇が避けられない。学習者に求められるのは、その都度、対象の姿を見極め、問題を解決しながら、自信を変革・成長させ続けられる主体性であると考え。

#### (2) 多面的な学習環境を見据えた学校教育の使命

「予測困難な社会」を背景に各所で叫ばれているのが、多面的な環境（家庭・地域・社会…等）を、学習者にとっての充実した学習環境として活かすことのできる重要性である。このためには、環境そのものの整備とともに、学習者自身が、それらを自らの学習環境として捉える、認識の在り方も重要となる。では、そのような認識の在り方とはどのようなものだろうか。すなわち、学校を離れた場所でも、あるいは卒業後の未来でも、「自ら」身の回りの様々な対象から学び続けようとする認識の在り方とはどのようなものだろうか。そして、そのような認識を現在の学校教育を母体としながら育てる教育のあり方とはどのようなものだろうか。

### II, 研究テーマと「目指す子ども像」について

以上の問題意識に基づき、本研究が着目したのは〈他者〉という概念である。ここでいう〈他者〉とは、現代哲学における〈他者〉概念を元としている。これは、自分にとって「異質な対象」を指し、一般的な「他者＝他の人間＝他人」に限らない。例えば、教室の友達や教師の他、数学、文学、美術、社会、身体など多様な対象が〈他者〉となりうる。ただし対象が学習者の既存の認識の枠内で解釈されているうちは、その対象とは〈他者〉とはならない。逆に見慣れた対象であっても、それが全く別の様相を見せた時、対象は〈他者〉として立ち上がる。〈他者〉とは機能性のことであり、〈他者〉性を発揮した対象のことを指す。

本研究は先の問題意識に基づき、このような自分にとって異質なものを、自分の認識の枠内では簡単に解釈し得ないものとの出会いから、自分の認識が更新することの良さを味わおうとする学習者像を目指している。このことを踏まえ、本研究における「目指す子ども像」を「〈他者〉を楽しみ続ける子ども」とした。

この「目指す子ども像」に向けた学習者の段階的な様相として、次のa～dを想定し、実践の指標とした。

- 〈他者〉に興味を持つ。
- 〈他者〉を深く知ろうとする。
- 〈他者〉と自己（あるいは自分の認識）とを比べ、

自己（あるいは自分の認識）を深める。

- d a～dを踏まえて、自己（あるいは自分の認識）を更新する。

## Ⅱ 本年度の研究副主題に至るこれまでの研究の経緯

### (1) 1年次 R2「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成—エモーショナルな力で描く教育デザイン—」

1年次の副主題にある「エモーショナルな力」は、当時の職員によって共有された学習者の「情動・情緒」面に着目し、学習者の学習（受験）成績に大きく傾いた価値意識やそれによる視野狭窄、友人への安易なレッテル貼りと思いやりの欠如、授業への興味関心の減退、物事への感謝の気持ちや謙虚な態度の消失等に問題意識を向けるものであった。この問題意識の共有を踏まえ、設定された研究副主題は、先の〈他者〉との出会いを楽しみ続けられるための学習者の情動・情緒面に着目して設定された。着目した情動・情緒とは、以下のようなものである。

- ・自分の認識の枠に閉じこもり、自己完結するのではなく、自分にとって異質なものを、自分の認識の枠にはおさまらないもの（〈他者〉）をこそ見据え、果敢に手を伸ばしていく行動を支える情動・情緒。
- ・〈他者〉との出会いの中で自分自身の認識を更新していくことへの肯定的な印象を育てていく情動・情緒。
- ・小学校の教育課程を離れた後も〈他者〉への出会いを大切に、〈他者〉から積極的に学ぼうとし、〈他者〉への謙虚な態度を維持するための情動・情緒。

以上の情動・情緒を「エモーショナルな力」とし、各教科で、その「エモーショナルな力」が発動し育成される授業のための学習者分析、授業実践、考察を行った。

### (2) 2年次 R3「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成 —メタ認知を促す指導と評価の一体化—」

2年時は、1年時の視点に加え、「メタ認知」を授業改善の視点として取り入れた。これは、学習者が自らの「〈他者〉を楽しみ続ける姿」をモニタリングすることの必要性によるものである。メタ認知を働かせる子供の様相の抽出や、一単位時間の授業や単元全体で、学習者が自らの姿をモニタリングするための手法が検討された。

### (3) 3年次 R4「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成 —メタ認知を働かせる学習活動と評価でカリキュラムを編む—」

これまでの研究に基づき、授業実践を通して検証しながら、カリキュラム試案を作成した。この年までに作成されたカリキュラム試案は以下のとおりである。

- ・各教科カリキュラム
- ・道徳カリキュラム
- ・総合学習カリキュラム
- ・児童会（委員会活動）カリキュラム。

## Ⅳ、これまでの課題を踏まえた4年次の研究副主題について

### (1) 課題1・カリキュラムの連動

一つ目の課題は、それぞれのカリキュラムがそれぞれのセクションごとに別個に作成されていることによる。このことは、それぞれのセクション（主に各教科）ごとの専門性を生かすという面では適した方法であった反面、各教科間、あるいは各学年間におけるカリキュラムの連動性の弱さという点においては課題を残している。目指す児童像に迫るためには、教科の学習だけでなく、学校全体の教育活動を結びつけて、本校の子どもを育てる力の推進力を得る必要があった。

### (2) 課題2・カリキュラムの評価

二つ目の課題は、カリキュラムの評価に関わるものである。私たちの試みが果たして、研究当初の問題意識に応える試みになっているのかどうか。なっていないならば、何が足りないのか、何をどう具体的に改善することで、この試みは当初の問題意識に応えるものになるのか。このことを明らかにするためにも、私たちのカリキュラムに適切な評価を施す必要があった。

### (3) 4年次の研究副主題について

課題1を乗り越えるために必要なのは、各カリキュラム間の連動を図ることである。昨年度までに作成した各教科カリキュラム・総合学習カリキュラム・道徳カリキュラム、委員会活動カリキュラムを突き合わせ、その再構成を図りながら、連動性を高めていくこと、これにより、初年度の私たちの問題意識に応える教育力を発揮できるようにしていきたいと考えた。本校のような教科担任制の学校でどのように教科間の壁を越えた連動を果たしていくのか。このことの実践的な模索の過程とその考察の成果を明らかにしていく。

課題2を乗り越える評価について、本校職員が共有した問題意識は、数値的評価や形成的評価への疑念である。学習者の情動・情緒面も含めた教育を実現しようとする本研究において、数値的な評価や形成的な評価が果たして適するかどうかということが疑念に上がっていた。本研究は、このような問題意識に基づき、新たに物語評価に活路を見出している。

以上のビジョンを元に4年次の研究副主題を「カリキュラムの連動を図り、学校の教育力を高める」とし、校内での研究の全体像の共有を図った。

## Ⅴ、4年次の具体策

### (1) 連動カリキュラムの活用

具体的方策の一つとして、昨年度までに作成した各種カリキュラムを突き合わせ、カリキュラムの連動性を高めることの実現を図った。その軸となるのは、本年度作成の学年カリキュラムである。この学年カリキュラムは、①コンピテンシーベースのカリキュラムと、②コンテンツベース

のカリキュラムの二種から成る。

### ① コンピテンシーベースの連動カリキュラム

コンピテンシーベースの連動カリキュラムは、各月を示した横軸と、自主・協同・探究・他者から成る縦軸で構成している。また、その力を身につけるための具体的な方策が下部に示せるようになっていて、

| 学年       | 4                             | 5                             | 6               | 7                               |
|----------|-------------------------------|-------------------------------|-----------------|---------------------------------|
| 1 学校     | 入学式<br>創立記念遠足<br>参観日①<br>通学開始 | 運動会                           | 参観日②<br>教育実習A   |                                 |
| 学年<br>生活 |                               |                               | 数学科の〈他者〉(学活)    | 平和学習(学活・道徳)                     |
| 異学年      | 比治山公園遠足(1・6年)                 | 学校探検(2年生と異学年種目(体育))           | 遊びを権やそ(1・2年生生活) | 水中ゲーム大会(1・2年生)                  |
| 教科       | 自己紹介(国語)<br>すきなものっぱい(造形)      | みんなに話そう(国語)<br>どうやってみをもるの(国語) |                 | 水泳学習(体育)<br>平和の色(造形)<br>水の色(造形) |
| その他      |                               |                               |                 |                                 |
|          | 入学式                           |                               | 参観日②            |                                 |

本カリキュラムは、身につけるべきコンピテンシーを横に並べることで、コンピテンシー同士の段階性、共通性を教師が見通し、計画的な運用ができるようになっていて、これを年度当初に作成することで、担当する学年にはどのような行事があり、それは何を身につけるためにあり、そのために事前・事中・事後に何をするのか、といった内容の見通しを立てることができる。コンピテンシー項目には、その目標を子供と共有しやすくするために本校の合言葉である「自主・協同・探究」を設定している。これに加え、「他者」軸を設けることで、各教科との連動が図れるようになっていて、ただしここで、各教科で育まれるコンピテンシーの射程が広く、あらゆる行事等に影響する性質を持つ場合、具体的な行事との連動を明示的に示せなくなる場合が想定される。(ex.音楽で他者の演奏のよさに気付く感受性…といったコンピテンシーは、あらゆる〈他者〉問題に通底するものとなる。明確に〇〇の行事に対応…という位置づけをしようするものではない。)その場合は、無理に各教科の内容を本カリキュラム表に書き込む必要はない。なぜならそれらを明示するための各教科カリキュラムは既に存在するからである。だがもし、このコンピテンシーを培うための授業コンテンツが、学年行事に近接する内容(コンテンツ)であった場合、もしくは近接させるための調整が可能であった場合は、積極的に学年行事等への内容(コンテンツ)の近接を図り、カリキュラムへの明示化を進めた。コンテンツの近接(ex.国語の戦争教材+総合の平和学習)が図られることで、学習者自身がそこで学ぶ学習内容の往還を図ることが可能になり、コンテンツ理解が進むと同時に、そこで身につけるべきコンピテンシー育成の増進も見込まれるからである。このために作成するのが、コンテンツベースの学年カリキュラムである。

### ② コンテンツベースの連動カリキュラム

コンテンツベースの連動カリキュラムは、各月を示した

横軸と、学校・学年総合・異学年・教科・その他を示した縦軸で構成されている。

|          | 学校行事                          | 学年行事・総合                       | 異学年交流           | 教科                              |
|----------|-------------------------------|-------------------------------|-----------------|---------------------------------|
| 学年       | 4                             | 5                             | 6               | 7                               |
| 1 学校     | 入学式<br>創立記念遠足<br>参観日①<br>通学開始 | 運動会                           | 参観日②<br>教育実習A   |                                 |
| 学年<br>生活 |                               |                               | 数学科の〈他者〉(学活)    | 平和学習(学活・道徳)                     |
| 異学年      | 比治山公園遠足(1・6年)                 | 学校探検(2年生と異学年種目(体育))           | 遊びを権やそ(1・2年生生活) | 水中ゲーム大会(1・2年生)                  |
| 教科       | 自己紹介(国語)<br>すきなものっぱい(造形)      | みんなに話そう(国語)<br>どうやってみをもるの(国語) |                 | 水泳学習(体育)<br>平和の色(造形)<br>水の色(造形) |
| その他      |                               |                               |                 |                                 |
|          | 入学式                           |                               | 参観日②            |                                 |

本カリキュラムは、各学年で行われる学校・学年総合・異学年・教科・その他の内容を一覧にすることで、各セッションごとの行事(活動)の連動性を促進するために作成する。コンピテンシーベースのカリキュラム同様、年度当初に作成することで、年間の見通しを強化するとともに、実際に運用しながら、その修正・改善を図っていく。また前述の通り、コンテンツ内容の近接や、意図的な実施時期の調整を行うことで、学習者のコンピテンシー育成の増進を図る。実践当時はコロナ禍の影響もあり、〈他者〉研究を進める上で、重要な様々な場との交流活動に大きな制限をかけざるを得ないことが多くあった。だが〈他者〉研究を進めるのであれば、校外学習や異学年交流(教室の外の〈他者〉)は、とても重要な学習材であるはずである。新しい場所、新しい人、いつもとは違う相手、こうした新たな場で、自分が試されると、学習者にとって貴重な〈他者〉体験が立ち上がる。本カリキュラムを活用しながら、意図的に異学年を中心とした「教室の外の〈他者〉」との交流を積極的に仕組みつつ、意図的な連動を促進することで、その教育効果を増進することを意図した。

### ③ 学習者自身が教科の枠を超えた連動を果たすためのシート「ヒロガル」および「ヒロガルブック」

先に示した、①、②のコンピ・コンテシートは、教師から見た連動性であり、子どもがその連動性を見取るためのものにはなっていない。子どもが各教科内外・各行事の連動性を主体的に見出せるようにするための方策が別途必要であった。

これを実現するために、コンピ・コンテシートを流用したPCを使った振り返りシートを作成し、実施したが、これには時間的なコスト(あるいは場所も)がかかった。実際にパソコンを開いて、キーボードを使って四つの枠を埋める作業だけで一時間を要するような手立ては、研究実践として現実的ではなかった。特に体育その他、教室以外で行う教科は、授業会場にPCを持ち込むか、教室で振り返りをするしかなく、そのため、振り返りのためだけに一単位時間を取られるという問題が起っていた。

以上の反省を踏まえ、作成したのが、次の「ヒロガル」

である。

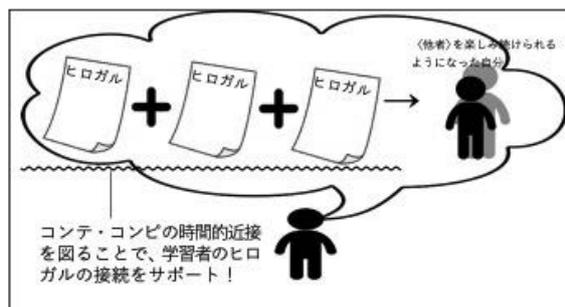
「ヒロガル」は、各教科・行事、共通の書式の用紙とし、それぞれ共通に「ヒロガル・ファイル」に綴じていく。このファイルに綴じられたシートの束を基に、児童が自分の〈他者〉学習の蓄積を自分で「物語化」することを狙った。

「物語化」は、各学期や一年等の節目の折に行う。その際には、ファイルに綴じられた束から、児童が自分でつながりを感じるシートを取捨選択し、それを並べて資料にしつつ、文字通り自分の「物語」を作成する。（呼称「ヒロガルブック」）これにより、児童自身による〈他者〉学習の評価を実現するとともに、教師による児童一人一人の成果の見取りを狙った。

## VI. 実践の成果と考察

### (1) 「ヒロガル」と、各カリキュラムの連動との関係

本研究は、子どもたちが〈他者〉を楽しみ続けられる子どもに育てていくことを目的としていた。（カリキュラムの編成と連動は、そのための手段である。）ここにおいて、「ヒロガル」は、教師によって〈他者〉を楽しむことを意識して作られた片々の授業や学校行事等を、子ども自身がつなぎ、〈他者〉を楽しみ続けられる主体に育つ自身自身を意味づけ、価値づけていくものとなった。このように子ども自身によって、〈他者〉に関わる授業や教育活動の接続が図られるのであれば、本研究は、各教科による〈他者〉授業の実施と「ヒロガル」だけでも成り立つようにも見える。では、カリキュラムの連動は何のために行われるのであろうか。それは、各教育コンテンツの実施の時間的近接を図ることで、学習者自身による接続を、より強く支援するためにあったのだと考えられる。



### (2) 【縦のつながり（各教科カリキュラム）】について

令和4年度までに作成した「各教科カリキュラム」は、主に1～6学年という学年をまたいだ段階的なアプローチがその主張点となっている。これをここでは「縦のつながり」と呼ぶことにする。「縦のつながり」は、各教科を単位としているため、外部に向けた教科毎の提案を主張しやすいという特性がある。

### (3) 【横のつながり①（コンテ・コンピカリキュラムをハブとした連動）】について

これに対し、基本的に一学年内を単位としながら、その中での各教科間の学習内容や学校行事等の連動性を意識して作成したのが、本年度作成の「コンテ・コンピカリキュラム」となる。これをここでは「横のつながり



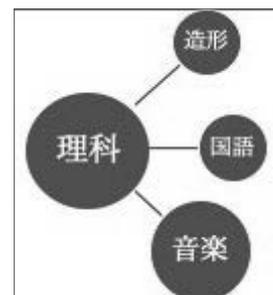
①」と呼ぶことにする。この「横のつながり①」の作成の狙いは、主に、学校・学年・異学年行事を「ハブ」としながら、ばらばらに作成された「縦のつながり」同士の連動を図ることによって、本校の教育力全体の増進を図ることにあつた。

この「横のつながり①」の内部は、「縦のつながり」に比べ、内容同士が時間的に近接するため、学習者自身がそのつながりを意識しやすいという良さがある。「横のつながり①」を充実させることで、同じ対象（コンテンツ）を多面的に見つめたり、多様な学習活動がねらう力（コンピテンシー）を統合的に身に付けたりしていくことができるという見通しを持った。

### (5) 【横のつながり②（各教科同士の連動）】について

本校では各教科ごとに研究を授業の形で示す校内授業研究会を行なっている。全職員参加の校内授業研究会は計6回あり、それ以外にも小規模の4人の別教科要員で行われるグループ授業公開（ブロック研）がある。これらを通して見えてきたのは、各教科の特質に応じて、連動の性質やそのアプローチ方法は異なってくるということであつた。

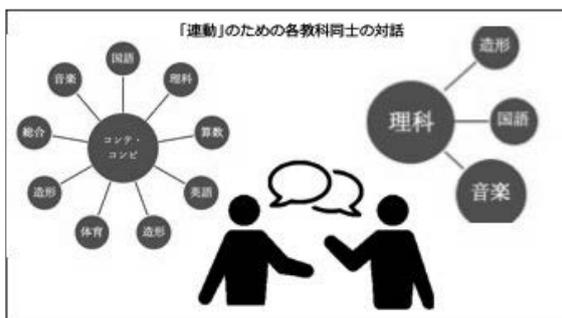
（ex. コンテンツに連動の重心を置く教科、コンピテンシーの連動に重心を置く教科。）また、コンテンツによる連動を図る場合、先のような「学校・学年・異学年行事」のハブを必要としない連動のパターンが多く見られた。（ex. 理科：



「音」を軸に音楽との連動と他教科への広がりを示した。国語：「いのち」を軸に生活科との連動と他教科への広がり示した。造形と音楽では両教科の単元が並行して連動するコラボ授業を示した。)「学校・学年・異学年行事」のハブを必要とせず、各教科が独自の連動性を発見できたことは大きな成果であった。

**(6)「縦のつながり」と「横のつながり①②」軸に、学校の教育力を高めるとは**

このように各教科が、それぞれの特質(縦のつながり)を存分に生かしながら(他者)へのアプローチを続け、同時に、他教科・学校行事との連携・連動を志向したアプローチ(横のつながり①, ②)を続けていくこと、その試みを続ける「動的過程」の中に、本研究の実際的な効用の一つがあるように思う。この「動的過程」とは、実際には、異なる教科の教員同士が、互いの連動性について考え、語り合う、思索と対話の中にある。この思索と対話によって、私たちは他教科の学習内容を知り、目の前の子どもたちが何と対峙しているのかを知り、その展望について共に考え、実践することができる。この動的な時間こそが重要であり、その意味で、「縦のつながり(各教科カリキュラム)」と「横のつながり①(コンテ・コンピカリキュラム)」「横のつながり②(各教科同士の連動)」は、私たちの対話のための議論の足場としてある。この教科の枠を超えた対話によって、教科の専門性と、それらを連動させた学校全体の教育力、両方を深めていくことを実現していく。



**Ⅶ、今後の展望 -カリキュラムの連動と、「対話」をより一層生み出すための方策について-**

上記の考察を踏まえ、カリキュラムの連動と「対話」の更なる充実を図るための本校の次年度以降の具体策について以下に示す。

- 1・「連動」を意識したカリキュラムの編成・・・4月(もしくは夏期・冬期休暇中)に、各教科のカリキュラムを突き合わせて、「連動」について検討する時間を確保し、カリキュラムの調整を行う。
- 2・教科単位・研究授業…研究単元で、各教科が、特別に連動を意識した授業をつくる。(校内授業研・ブロック研) これには複数の教科が水平な立場から連動するコラボ単元・授業を含む。
- 3・指導案の事前検討会(ブロック)で連動について話し合う。

1は、各教科カリキュラムを学年ごとに並べ、連動の可能性を模索し、カリキュラムの再編を行う。網羅的なアプローチであると言える。2, 3は、1で作成したカリキュラムをベースにしつつも、各職員がそれぞれの専門性を活かしながら、提案するものとなる。1が網羅的なアプローチであるのに対し、2は局所的で個別的なアプローチとなる。2, 3は局所的・個別的なアプローチであるが、本校職員16名(担任+学年担・主幹)がそれぞれに力を入れた実践を持ち寄ることで、本校全体の教科間連動は促進されるものと考えている。

